

ペン俳句会 句会報(三二〇号)

令和三年五月六日

新型コロナ情勢下の「メール句会」「オンライン句評会」を実施。

兼題『蝌蚪』並びに『薄』

大津 そうかい

見て見てよ一輪車の子風光る
諍ひの後の屋上春の月
揚げたての若鮎生の苦みあり
遠き日の変身の夢蝌蚪に足
柏餅情薄かりし父を詫ぶ

志村 良知

桜蕊降りみて薄き轍かな
静謐や満天星の花木に満つる
楠若葉薄着に沁みる風と陽と
籠り居や富士薄青に日々夏へ
園児らの群れて浅瀬は蝌蚪の難

宮原 凧

背後より散華のごとき桜浴ぶ
春の山泥だんご供ふ道祖神
花びらとバスに乗り来る盲導犬
裸の子バケツの中は蛙の子
片頬はっかに薄荷ドロップ昭和の日

齊藤 まさお

蝌蚪を見る子らの眼差し学者めく
嵐止んで光飛び交ふ薄暑かな
工コバッグ提げて急坂薄暑かな
初夏の部屋広くなり模様替
青空を指して水木の花帽子

長尾 進一郎

大ジャンプの夢見てをりぬ小さき蝌蚪
春宵の薄着を悔やむにわか雨
鯉幟の直立不動風を乞ひ
雨毎に草丈伸ばや夏近し
ただ冢に籠るは惜しき五月晴れ

首藤 しずを

くろぐろと命ひしめく蝌蚪の池
海原に白き音符と卵波生る
とびきりの母子の笑顔聖五月
水のくねり鯉のあひ寄る薄暑かな
谷川の若葉がお菜車中飯

森田 元斐

また一步鷺の迫る瀬薄暑来ぬ
鐘の音や蝌蚪限りなく産まれ出づ
筍を掘る媪ひとり明け鴉
ベランダを飛び出し空へ鯉幟
芍薬の誘ふ外道へ雨の中

中村 晃也

日焼け後の肌の心配薄化粧
居酒屋の薄商ひや額の花
飛行機の腹を見上げて潮干狩
蝌蚪を追ふ噛みつき亀の面構え
蝌蚪泳ぐ人の精子もかくあるか

高橋 由紀子

ジャスミンの黄色を活けて三日なる
釣りの台二つ並べて春うらら
緑陰や讚美歌流る過疎の村
濃き薄き養生芝をつばめ舞ふ
昼下がり独り弁当蝌蚪寄りぬ

安藤 晃二

薄衣や祖母に引かれし墓参かな
足裏を擦る石や蝌蚪掬ひ
女子ハイク覗き込みたる蝌蚪の池
観音の山上遥か朝曇り
すり鉢の谷一杯のつつじ燃ゆ

新田 ゆふき

泥踏めば揺れて驚く蝌蚪の紐
ラング・ド・シャの薄き包みや青葉風
薄桜百鬼夜行の戻り橋
桜蕊降りて夕べの道明かし
青嵐巻いて連れ去る子のつむじ

土屋 しおん

犬連れて遠まわりする蝌蚪の水
蟬生まる薄陽かたむく古戦場
山笑ひエコー悲しむ谷間越え
風薫るペダル心地に買い忘れ
陽炎にシヤングリラ揺れ加速する

内藤まりこ

ぬめぬめと蠢き光る沼の蝌蚪
放射光薄暮の空や夏蛙
悩ましや花壇に目立ち犬ふぐり
雨足や牡丹の寺の長廊下
武者人形飾りて語る老夫婦

今回は、令和三年六月三日(木)です。

兼題は、大津そうかいさん出題の『螢』並びに
知世先生出題の『乾』です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

蛍が何故光るのか、蛍は地球の奇跡だーと蛍に
魅せられた人・大場信義著『ホタルの木』という
本を持っています。蛍火はオスとメスが出会うた
めの大切な「ことば」だと蛍に魅せられた作者は
述懐します。ゲンジボタルのメスは葉にとまって
不規則にゆつくりと強く発光し、オスは群翔して

約2秒に一回(東日本では4秒に一回)発光して、
周期を揃えてメスを探す。メスは周期を合わせず
にオスを誘っていて、結果、同じ種の蛍が問題な
くお互いに誘引され種を守っているのだそうです。
点滅は蛍どうしの言葉だという作者の指摘に、螢
火に一層の不思議と親しみを感じます。

草の葉を落つるより飛ぶ螢かな

芭蕉

暗闇の笥をつたふ螢かな

几兆

人殺す吾かも知らず飛ぶ螢

前田普羅

螢臭き人の手をかぐ夕明り

室生犀星

螢に水吹いて唇さみしくす

鈴木真砂女

親一人子一人螢光りけり

久保田万太郎

ゆるやかに着て人と逢ふほたるの夜

桂信子

螢籠昏ければ揺り炎えたたす

橋本多佳子

螢火を見失ひたる川あかり

能村登四郎

螢の夜濡れて熱もつオートバイ

山本左門